

成人の学習プログラムへの問題解決技法導入の視点と実際

上條 秀元

要旨

本稿は、昨年度のセンター紀要論文を踏まえて、問題解決技法の内容を生涯学習における学習方法との関連で明らかにするとともに、実際の事例においてどのような技法が導入されたかを考察し、今後の課題を示すものである。

まず、問題解決技法と生涯学習の方法との関連について検討した。そして、問題解決技法は生涯学習の方法とは別個の、独立した技法(方法)ではなく、生涯学習の方法の中で、問題解決のプロセスにおいて有効な技法と位置づけた。

次に、市町村における導入の事例を分析した。ここでは、問題解決のプロセスにおいて、どのような問題解決技法が導入されたかを考察し、今後問題解決技法を導入した活動を促進するための課題を明らかにした。

Aspects and the Practice for Introducing Problem-solving Methods into the Learning Program for Adults Hidemoto KAMIJO

Abstract

This paper intends first to make clear the contents of problem-solving methods in relation with methods of lifelong learning, secondly, to study the actual case applying problem-solving methods.

First, by examining the relation between problem-solving methods and lifelong learning methods, I considered problem-solving methods are not separated from lifelong learning methods, but belong to the latter and useful for problem-solving.

Next, I analyzed a case in the city where these methods were applied. Here, I analyzed what methods were introduced into the process of problem-solving, and then, I made clear the policy for promoting the introduction of these methods.

Key Words : Learning Program, Problem-solving Method

はじめに

宮崎大学生涯学習教育研究センター研究紀要第3号(平成10年2月発行)の論文「問題解決技法の導入による成人学習プログラムの開発」において、問題解決技法の特徴と意義を述べ、次いで小林市の具体的な事例(「おも

しろ発見塾」)に基づいて、問題解決技法導入の視点や方法を述べた¹⁾。

ここでは、問題解決の基本的なプロセスを示したが、問題解決技法とは具体的にどのような技法を指すのか、また実践例においてどのような技法が適用されたかについては触れ

なかった。そこで、本稿では、問題解決技法の内容を生涯学習における学習方法との関連で明らかにするとともに、実際の事例においてどのような技法が導入されたかを明らかにし、その成果と今後の課題を示すことにする。

1 生涯学習の方法と問題解決技法の関係

前述の論文において、問題解決技法を「学習者が問題を発見し、問題解決につながる目標を設定し、主体的な取り組みにより目標を達成するまでの過程を導くための方法」²⁾と定義した。

この定義を補足すると、問題解決技法とは、第1に、一つの(特定の)技法(または方法)のことではなく、問題解決に役立つ様々な技法の総称と言うことができる。

第2に、生涯学習の方法の中で、問題解決に役立つ技法として活用されるものを指している。つまり、問題解決技法は、生涯学習の方法とは別個の、独立した技法として存在するものではない。しかし、生涯学習の方法の中で、問題解決のプロセスにおいて有効な技法が存在していることから、問題解決技法というような表現が用いられていると言えよう。このことについて、山本恒夫は「学習のステップでは、さらに学習の展開場面でも問題解決技法が使われる。学習の展開(知識・技術の習得、態度変容)のステップは、まさに学習を実際に行うステップなので学習方法が使われるが、必要に応じて問題解決技法も用いられるのである。(中略)このように述べてくると、問題解決技法と学習方法を区別する必要はないようにもみえるであろう。しかし、このことについての議論は、生涯学習の研究が進み、両者を統合した新しい生涯学習の方法が提唱されるまで待つことにしたいと思う。」³⁾と述べている。

それでは、生涯学習の方法とはどのような内容を指すのであろうか。

辻 功は生涯学習の方法を個人学習、集団学習、集会学習の3つの形態に分け、下記のように、それぞれの学習方法を例示している⁴⁾。なお、集会学習については、学習方法の例示は無いが、解説の内容を参考にして学習方法を記述した。

- 個人学習……印刷媒体を利用した学習、視聴覚メディアを利用した学習、社会教育施設を利用した学習、通信教育機関を利用した学習
- 集団学習……講義と討議を中心として、視聴覚教材を併用する。また、レポート作成、見学、実習、調査、プロジェクトなどが組み込まれる。
- 集会学習……講義を中心として、視聴覚教材を併用する。

なお、各種の討議法が成人の学習場面で活用されている。具体的な種類は図1のように例示される。これらの各種討議法や視聴覚教材の活用、レポート作成、見学、実習、調査などは、問題解決の場面に応じて、問題解決技法としても活用できるものである。

高橋 誠は問題解決の「ステップ」(プロセス)との関連で問題解決に役立つ技法(「適応技法」)を表1のように整理している⁵⁾。その際、J.P.ギルフォードの発散的思考と収束的思考の考え方を援用して、2つの側面に分類している。高橋によれば、発散的思考とは「さまざまな方向に思考が働くことによって、いろいろな発想を生み出すこと」、「与えられた条件から多種多様な解決法を生み出す思考」のことである。収束的思考とは、「正しい答えをもたらす働き、つまり与えられた条件から唯一の解答を導き出す思考」⁶⁾のことである。

表1に示された技法は、企業内研修等における活用を意識したものであり、地域の社会教育ないしは生涯学習の関係者になじみの無

成人の学習プログラムへの問題解決技法導入の視点と実際

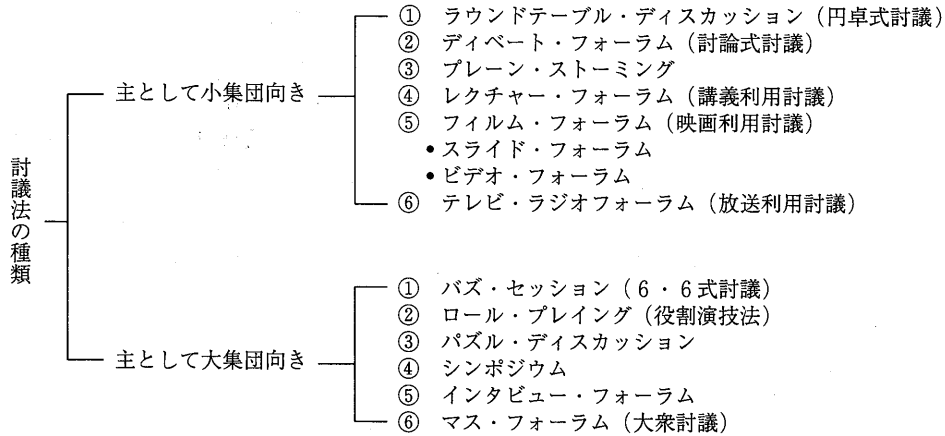


図1 討議法の種類

表1 問題解決ステップと適応技法

問題解決ステップ		発散思考		収束思考	
		発散データ	適応技法	収束方法	適応技法
① 問題設定		問題	インタビュー 討	評価	各種評価法
問題把握	② 現状分析	事実データ	B C B S ブレインライティング	空間型	親和図法 K J クロス法
	③ 問題点分析	問題点データ	欠点列挙法 ブレインライティング B S	系列型 (因果法)	特性要因図 因果分析法
④ 目標設定		目標	チェックリスト法	評価	各種評価法
問題解決	⑤ 構想計画	着想データ	B 希望点列挙 属性列挙 形態分析 シネクテイク N M	空間型	親和図法 K J クロス法
	⑥ 具体計画			系列型	ストーリー法
	⑦ 手順計画	作業データ	B C B S S 法	系列型 (時系列法)	カードパート法 ガントチャート
⑧ 全体評価		反応データ	アンケート調査	評価	各種評価法

いものが多い。公民館の講座や自主グループなどの地域の学習活動においては、あまり難しい技法の導入はかえって有害である。本来、問題解決という目的を達成するための有効な技法の導入のはずであるのかかわらず、(複

雑な)技法の導入が自己目的化してしまうということになりかねない。こうなると、学習者の学習意欲がそがれたり、問題解決のプロセスを複雑化したりといったケースも想定される。このようなことは避けなければならない

い。しかし、問題解決技法の導入がまだまだ未開拓という現状であるから、今後問題解決技法に習熟し、必要に応じて導入することが求められよう。

例えば、KJ法ないしは類似の方法が時折用いられるようになった。この技法は表1の「②現状分析」、「⑤構想計画」のステップの「収束思考」の分野に例示されているように、問題の整理の場面や新たな課題の発見の場面に有効である。学習場面に応じて、これを適切に活用するならば、学習者の問題意識の整理や新たな事業（活動）の企画などに有効であろう。

2 問題解決技法導入の実際

－小林市「小林おもしろ発見塾」の2年間の取り組みから－

(1) 「小林おもしろ発見塾」の取り組みと問題解決技法

「小林おもしろ発見塾」は、平成9年度に

小林市の主催事業（担当は企画調整課）として開設された。

小林市の良さや面白さの再発見に資する講義の機会を設けるとともに、参加者がグループを編成して、地域づくりに関する特定のテーマに取り組む自主研究の機会を設けている。この内、特に後者の自主研究において問題解決の技法を採用している。これは、特定の課題の達成のために取り組むという、自主研究の特徴に適ったものである。

自主研究は図2に示すプロセスで行われた。これとの関連で適用された技法を図2に示そう。これらの技法の導入が、参加者の自主的かつ能動的な取り組みをもたらすとともに、研究（学習）成果の結実と研究（学習）成果を生かした地域づくりへの意欲の形成に積極的な役割を果たしたと思われる。

自主研究のテーマは、「講（かくれ念仏）の由来と現状」、「地域資源（水と食）としてのオカベ（豆腐）作りの実践研究」、「小林市に

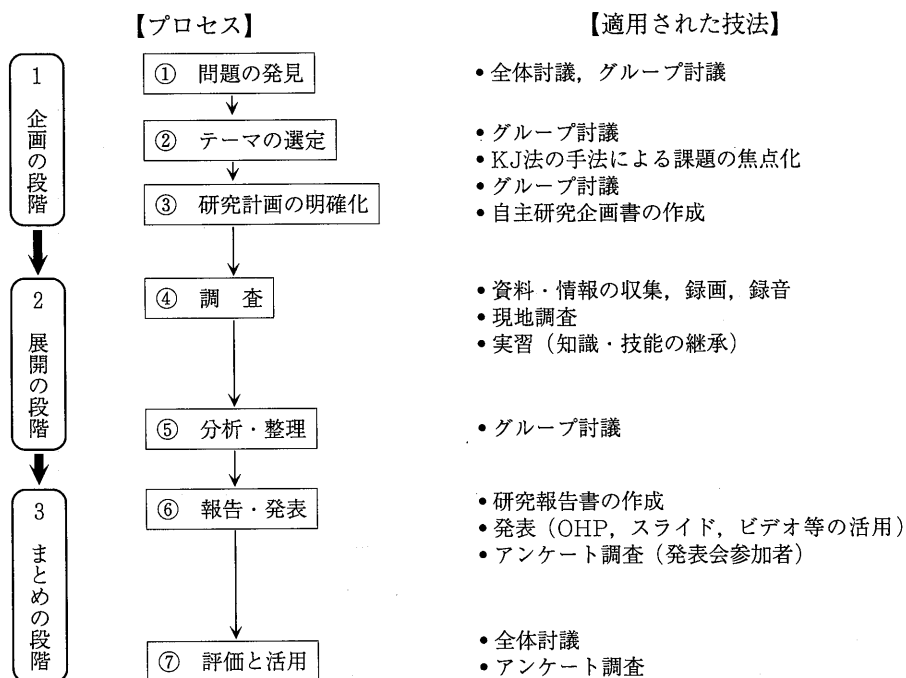


図2 自主研究のプロセスと適用技法

自生する山野草（エヒメアヤメ）の調査と保護」,「小林新田場の数え唄の調査」,「おいしいもの再発見『西諸牛』」,「小林市の水資源を考える」(用水路の調査など)の7つであった。短い期間であったが、現地での丹念な調査等により、新しい発見を含めて一定の水準に達する内容であった。例えば、数え唄の研究グループは、小林市新田場の数え唄を地元の高齢者から収録するとともに、新田場の数え唄にまつわる踊りを高崎町や鹿児島県の吾平町から取り入れ、独自の踊りを創作した。この取り組みをきっかけとして、地元に保存会が誕生し、地域に根ざした活動がなされつつある。

研究の成果は研究報告書にまとめられ、研究発表会において、OHP、スライド、ビデオ等を用いて発表がなされた。研究発表会には150名を越える市民が参加し、研究内容や発表方法への高い評価が得られた。

(2) 初年次(平成9年度)の終了時における参加者の感想と意向

初年次(平成9年度)の終了時に、参加者に対してアンケート調査を行い、19名(この時点での参加者数41名)から回答を得た。調査の主な内容は、第1に、小林市についてのこれまでの学習経験、第2に『小林おもしろ発見塾』の学習についての感想と今後の希望であった。

回答者のプロフィールは、性別は、男性31.6%、女性68.4%である。年齢別は、20代から70代まで幅広い。特に50代(36.8%)が多く、次いで、60代(26.3%)、40代(15.8%)である。職業は、自営業(31.6%)、勤め(26.3%)、専業主婦(21.1%)、無職(15.8%)、パート・内職(5.3%)などである。これらは、41名の参加者のプロフィールに近い特徴を有している。

① 小林市についての学習経験

①-1 小林市についての学習の有無

まず、小林市についての学習の有無をたずねた。「『小林おもしろ発見塾』に参加する以前に、小林(市)について関心をもって学習したことがありますか。」という問いに対して、「ある」と答えた人は約3割(31.6%)であり、7割近くが学習経験がない。

①-2 これまで学習した分野

学習したことがある人に、これまで学習した分野について、11分野の中から主な分野を2つまで選んでいただいた。「小林市の歴史」が5名で特に多く、次いで、「小林市の星、水資源等の自然環境」(2名)をはじめとして、「小林市の文化財」(1名)、「小林市の遊びの文化(伝承遊び等)」(1名)、「小林市の昔話、言い伝え等」(1名)、「小林市の植物(花、樹木等)」(1名)などの4つの分野がいずれも1名であった。

①-3 学習を行った時期

これらの学習を最も熱心に行った時期は、ほとんどが「学校を卒業してから」(3名)、「定年退職後または高齢期を迎えてから」(2名)であり、小・中学生期(子供会、地域の団体活動などの中で)や高校・大学生期(授業、部活動、地域の団体活動などの中で)は0であった。

①-4 学習方法

これらの学習をどのような方法で行ったかについて、7分野の中から主な分野を2つまで選んでいただいた。

「ひとりで本やテレビ、ラジオなどを利用して」が4名で特に多く、次いで、「職場、学校、地域などのグループ、サークル、団体で」(2名)、「教育委員会、公民館などの公的機関が行う学級、講座、教室などに参加して」(1名)であった。一方、「学校の授業、ゼミ、サークルなどで先生に教えてもらって」、「高校や大学の公開講座で」、「民間のカルチャーセン

ターなどで」はいずれも0であった。

このことから、成人の地域に関する学習は、個人学習と相まって地域の学習機会の役割が大きいことが示唆されていると思われる。

② 『小林おもしろ発見塾』の学習について

次に、『小林おもしろ発見塾』の学習についてたずねた。

②-1 参加したきっかけ

まず、『小林おもしろ発見塾』に参加したきっかけは、表2に示すように、「市の回覧版を見て」が約半数の52.6%で特に多い。回覧板が地域の情報伝達手段として有効に機能していることが示されている。次いで、「友人や知人にさそわれて」、「市の広報を見て」の順である。

表2 『小林おもしろ発見塾』に参加したきっかけ n=19 (%)

参加したきっかけ	割合
1 市の広報を見て	10.5
2 市の回覧版を見て	52.6
3 友人や知人にさそわれて	21.1
4 その他	15.8
合計	100

②-2 参加した目的

『小林おもしろ発見塾』に参加した目的については、表3に示すように、「小林のことをもっと知りたいから」が約8割を占め、特に多い。「自分が関心をもっているテーマについて学習(研究)を深めたいから」(36.8%)がこれに次いでいる。これに対して、「子供達や孫達に小林の良いところを教え(伝え)たいから」、「市外の人に小林の良いところを市内出来るようになりたいから」、「小林のために役に立ちたいから」などの、学習成果を地域のために生かす意向は比較的少ない。

ここから推察されることは、まず、学習す

表3 『小林おもしろ発見塾』に参加した目的(該当する番号を2つまで選択) n=19 (%)

参加した目的	割合
1 小林のことをもっと知りたいから	78.9
2 自分が関心をもっているテーマについて学習(研究)を深めたいから	36.8
3 市外の人に小林の良いところを市内出来るようになりたいから	21.1
4 子供達や孫達に小林の良いところを教え(伝え)たいから	31.6
5 小林のために役に立ちたいから	10.5
6 その他	0

ることへの関心が参加者の多くに共通してあり、学習を基礎として、(人によっては)学習成果を地域のために生かす志向につながっていくということである。

②-3 参加して得られたこと

『小林おもしろ発見塾』に参加して得られたことは、表4に示すように「新しい友人や知り合いが得られた」が約8割を占め、特に多い。このことは、この事業がこの塾の参加者だけでなく、地域での調査活動等を通じて人間関係を広めることに寄与したことを示していると言えよう。また、「地域の高齢者等との交流により、その豊かな経験や生き方から教えられた」は約4割を占めており、高齢者との交流にも積極的な役割を果たしたことが示されている。

「小林の良さを見出し、あるいは認識を深めることが出来た」、「自分が関心をもっているテーマについて、学習や研究を深めることが出来た」など、学習目的で多かった事項への評価が高い。特に、後者は「目的」に比べて「得られたこと」は約20%多く、参加者が関心をもっているテーマについての学習や研究を深めるという点で、この事業が効果的であったことが示されている。

一方、「子供達や孫達に小林の良いところを教え(伝え)る手がかりが得られた」、「市外

表4 『小林おもしろ発見塾』に参加して得られたこと
(該当するすべての番号を選択) n=19 (%)

得られたこと	割合
1 小林の良さを見出し、あるいは認識を深めることが出来た	68.4
2 自分が関心をもっているテーマについて、学習や研究を深めることが出来た	57.9
3 課題意識をもって学習や研究をする態度や意欲が培われた	36.8
4 市内の人に小林の良いところを案内する手がかりが得られた	31.6
5 子供達や孫達に小林の良いところを教え(伝え)る手がかりが得られた	36.8
6 小林のために役に立つ活動をするための手がかりが得られた	26.3
7 人の前で自分の考えやアイデアを述べることが、以前より出来るようになった	10.5
8 人の意見やアイデアに耳を傾けることが、以前より出来るようになった	31.6
9 新しい友人や知り合いが得られた	78.9
10 地域の高齢者等との交流により、その豊かな経験や生き方から教えられた	42.1
11 その他	5.3

の人に小林の良いところを案内する手がかりが得られた」、「小林のために役に立つ活動をするための手がかりが得られた」などの学習成果を地域のために生かす事項については、30%台から20%台であり、学習目的にほぼ対応して学習成果が得られたことが示されている。

また、「課題意識をもって学習や研究をする態度や意欲が培われた」、「人の意見やアイデアに耳を傾けることが、以前より出来るようになった」なども、いずれも30%台を占めている。これは自主研究によるところが大きいと思われる。

②-4 次年度(平成10年度)の参加希望

「来年度も『小林おもしろ発見塾』に参加したいと思いませんか」という問いに対しては、「参加したい」、「参加したいが時間的なゆとりがない」がいずれも4割であった(表5)。参加希望がありながら、時間的なゆとりがないと

答えた人が少なくないことの原因は何であろうか。このアンケートの最後の「要望や意見」、この講座の最後に書いていただいた感想文、最終日にうかがった感想等によると、一番の理由は自主研究の負担が少なくなかったことである。自主研究そのものに慣れていないことと相まって、自主研究の開始が9月以降となったために短期間に集中的に調査活動や研究のまとめを行わなければならなかったこと。特に、3月という年度末の忙しい時期に、研

表5 次年度の参加希望 n=19 (%)

参加した目的	割合
参加希望	割合
1 参加したい	42.1
2 参加したいが時間的なゆとりがない	42.1
3 参加したいとは思わない	0
4 その他	10.5
無回答	5.3
合計	100

究発表に向けて何度もグループ毎の会合を重ねなければならなかったことである。また、学習だけならいいが、自主研究に参加する気持ちはないという人もいた（特に高齢者）。「その他」の理由は、夜間であるため、交通の便が悪いということであった。

②-5 次年度（平成10年度）に希望する研究テーマ

次年度（平成10年度）に希望する研究テーマについて、これまで分析してきたアンケートとは別に、次年度参加希望者（21名。この

内、「場合によっては参加」が6名。）に記述していただいたものをまとめたのが表6である。研究テーマはほぼ7分野に分けられた。研究テーマと併せて、研究の目標についての記述もなされており、その中には、研究の成果を冊子やマップとしてまとめたり、特産品の開発に結び付けたり、郷土資料館の建設につなげるといった具体的な目標が見られる。また、若い世代に伝えたいという希望も多い。

表6 平成10年度に希望する研究テーマ
～平成9年度塾生へのアンケートより～

1	小林の美しい自然の掘り起こし <ul style="list-style-type: none"> •二原古墳，ほたる館，コスモス牧場など •小林の美しい景観の冊子作り •小林の自然の美しさの残っているところを見つけて歩きたい •小林の四季の研究 → 子供達に伝える •ほたるのボランティアガイド
2	小林の水資源 <ul style="list-style-type: none"> •小林の水資源について 小学区毎に湧水地，河川の調査とマップ図の作成（できれば小中学生に社会科の勉強として参加させたい。） •用水路の調査（ライフワークにしたい） •湧水地の調査→マップ作成 •名水百選に選ばれた水を全国に広める（例．ペットボトルでの売り出し，商店街通りに水のみ場，出の山に水車設置）
3	小林の食文化，伝承の食文化 JAや婦人会とタイアップして小林特産として売り出す研究
4	小林の史跡，施設等の掘り起こし <ul style="list-style-type: none"> •文化財，史跡等の調査 → 冊子をつくりたい → 郷土資料館を設置したい •小林，西諸の地名について研究したい
5	伝承遊び，伝統工芸などの若い人への継承活動 <ul style="list-style-type: none"> •伝承遊び，道具など •小林の遊びの文化 道具だけでなく，まりつきの歌，お手玉作り+遊びの歌などの発掘と継承 •竹細工やわら細工などの名人芸
6	伝統行事等の掘り起こし（と「再生」）
7	小林の歴史 <ul style="list-style-type: none"> •佐土原から移住したつつみ村についての調査

(3) 2年次(平成10年度)における取り組みの発展

2年次にあたる平成10年度には、受講者を再募集して再出発することとなった。その結果、参加者は36名で、この内、前年度からの継続参加者は26名であった。

学習プログラムを表7に示そう。前年度と比較して大きく異なる点は、自主研究の取り組みが早めに開始されたことである。つまり、第2回の6月17日には、研究テーマの選定の

ための話し合いに入っている。これに対して、前年度において研究テーマの選定のための話し合いに入ったのは、9月10日であった。その分、平成10年度は自主研究の期間が長くなり、余裕をもって研究に取り組むことが出来るようになった。これは、継続参加者が多いために、初年度のように、ウォーミングアップのための期間を設けなくとも、早期から自主研究のための取り組みが可能となったことによる。

表7 平成10年度小林おもしろ発見塾 講義・研究活動プログラム

い つ : 毎月第水曜日 午後7時から9時まで
どこで : 小林文化会館 会議室2

月 日	講 義 ・ 研 究 活 動 の テ ー マ	講 師 ほ か
平成10年 5月20日	開講式 オリエンテーション	市長あいさつ
5月27日	出の山ホテルのボランティアガイド(有志)	前小林高校教諭 永井 彪 ※会場: 出の山
6月17日	研究テーマの選定(1) 講義と話し合い, 班編成	
7月15日	研究テーマの選定(2) 研究計画の作成	
7月29日	身近かな山野草について	山野草研究家 滝 一郎
8月23日	魅力ある地域づくりのヒント(一般公開講座) 寸劇	愛媛県双海町地域振興課長 若松進一 ※会場: 文化会館小ホール
8月27日	山野草・山菜教室(野外活動)※採集, 調理, 試食	山野草研究家 滝 一郎
9月16日	文化財探訪(スライド撮影と解説)	史談会会長 井上改造
10月21日	水資源と用水路	宮崎大学農学部教授 志岐敏明
11月28日 29日	調査研究(先進地視察)及び交流会	※佐賀県広域交流圏及び佐賀市
12月16日	おじいちゃんおばあちゃん伝承の味~郷土の食材, 素材を使った郷土料理の研究ともてなし~	東方のおばあちゃん
12月28日	創作劇「好っじゃー小林」キャストの決定と打ち合わせ	
1月13日	創作劇「好っじゃー小林」練習	
1月20日	自主研究のまとめと研究発表会の打合わせ	
2月3日	創作劇「好っじゃー小林」練習	
2月10日	創作劇「好っじゃー小林」練習	
2月17日	研究発表会のリハーサル	
2月20日	研究発表会	※会場: 文化会館小ホール
2月3日	閉講式 修了証書の交付 感想と評価	

注 自主研究に関わるテーマはゴシックで示した

一方で、各グループの要求に基づいて、研究テーマに関する講師を招聘したり、まちづくりの実践家による講演（一般公開講座）の機会を設けるなどの、学習の機会も折り込んでいる。

平成10年度は、自主研究グループの代表者の中から塾長を選出し、塾の運営について協議をするなど、参加者の自主性が高まった。新たな活動に積極的に取り組む気運も生まれた。例えば、5月27日の有志によるホテルボランティアガイドの取り組みは、前年度の学習成果を生かしたいという気持ちの表れであった。さらに、12月16日の「おじいちゃんおばあちゃん伝承の味」は、塾生が協力して高齢者の指導のもとに郷土の食材を使って郷土料理をつくり、市長を初め、関係者をもてなした。食器は、竹や笹などの自然素材を活用するという工夫が見られた。また、塾生と担当職員の協力による創作劇「好っじゃー小林」の公演の話がもちあがり、12月から研究発表会までの3か月間という短期間に熱心な練習が行われた。

自主研究のテーマは、参加者の希望にもとづいてグルーピングをした結果、次の7つのテーマに決定した。1 あの橋この橋（石橋の研究）、2 観光資源の再発見、3 水資源・用水路の調査研究、4 そうだ田舎を食べよ

うー21世紀へ残すおばあちゃんの味ー、
5 辺境の地の研究、6 神社・伝承芸能の研究、7 新田場数え歌の伝承

なお、上記のテーマの表現は、研究報告の際の表現であり、必ずしも当初の表現とは一致していない。

前述の、平成9年度の塾生へのアンケートで出された希望（表6）と較べて、アンケートで示された多様な希望を生かしきれないという制約がある。また、「小林の自然」の分野についても、アンケートでは多くの希望が出されたが、「辺境の地」に限定して取り上げることとなった。

主な理由は、数名のメンバーによるグループ研究という形を取るために、テーマの数を限定せざるを得ないということである。

第2の理由は、グループ編成が「この指とまれ」方式でなされるために、テーマの提案者の提案内容に対する共感という要因が強く働くことである。いわゆるオピニオンリーダーの役割が大きいと言い換えることができよう。

また、新たな参加者からの提案により、新しい視点が加えられるという現象も見られた。例えば、前述の「辺境の地」の研究グループの成立である。

次に、初年度の研究テーマとの関連を見よう（表8）。

表8 2年間の研究テーマの比較

分野	平成9年度	平成10年度
自然	・小林市に自生する山野草（エヒメアヤメ）の調査と保護	・辺境の地の研究
水資源	・小林市の水資源を考える（用水路の調査など）	・水資源・用水路の調査研究
食文化	・地域資源（水と食）としてのオカベ（豆腐）作りの実践研究 ・おいしいもの再発見「西諸牛」	・そうだ田舎を食べようー21世紀へ残すおばあちゃんの味ー
伝統文化、伝承芸能	・講（かくれ念仏）の由来と現状 ・小林新田場の数え唄の調査	・神社・伝承芸能の研究 ・新田場数え唄の伝承
観光資源、その他		・観光資源の再発見 ・あの橋この橋（石橋の研究）

平成9年度の4つの分野については、10年度も何らかのテーマが設定されている。この内、2年間にわたって取り上げられているテーマは、「水資源」の分野の、用水路の研究と「伝統文化、伝承芸能」の分野の数え唄の研究である。数え唄の研究は、数え唄の「調査」（平成9年度）から数え唄の「伝承」（平成10年度）へとテーマの発展も見られる。また、10年度は新たに観光資源等の分野に関するテーマが設定された。

まとめ

最後に、成人の学習プログラムへの問題解決技法導入の課題をまとめよう。

一つは、地域づくり等に関する課題に共同で取り組むような研究スタイルの普及と定着を図るということである。高学歴化と学習内容の高度化が進む中で、人々の自主的な学習や研究への気運は高まりつつあるが、前述のような取り組みはまだ一部の動きに止まっているというのが現状であろう。

この点で、小林市の事例が示唆するように、人々の自主的な取り組みへのきっかけづくりをする上で、行政の果たす役割が少なくない。小林市の場合は、市の主催事業の中に自主研究を位置づけた。参加者の多くはこのような研究スタイルに慣れていなかったために、1年目は自主研究の進め方についての具体的な解説が必要であった。2年目に入ると、継続して参加する人が多かったためもあり、自主研究への取り組みは比較的スムーズになされるようになった。3年目にあたる平成11年度には、担当部局が市の企画調整課から教育委員会社会教育課に変わるが、同様に市（教育委員会）の主催事業として実施される。将来的には、自主運営による「おもしろ発見塾」に移行することが望ましいと思われる。これにより、参加者の自発性や積極性が高まり、自主研究の取り組みがさらに発展することが

可能となろう。その際、行政による（財政的な支援を含めて）側面援助が期待されよう。

第2に、このような問題（課題）解決のプロセスにおいて、有効な問題解決技法の導入を図るということである。小林市の事例においても問題解決のプロセスに対応して、問題解決技法の導入を図った。今後も有効な問題解決技法の導入を図ることが期待される。また、参加者が問題解決技法についての理解を深めて、自ら積極的に活用することも期待したい。

第3に、問題解決を図るためには、長期的な視点も重要である。例えば、食文化の分野において、高齢者からの継承を図りながら、地域の自然素材の活用による小林市独自の食文化を開発するという課題を設けたとする。この課題は、1年間だけでは、その一部しか達成できないであろう。長期的な視点に立った取組が必要と思われる。

第4に、問題解決という言葉が示すように、研究の成果をどのようにまとめ、生かすかということも重要である。研究の成果のまとめ方は、報告書の他、ビデオやスライド、地図、ガイドブック等、研究の目標や内容に応じて、様々な方法が考えられる。また、研究の成果を広め、住民がその成果を共有することも重要な課題である。小中学校で発表の機会を設けることにより、青少年の地域への理解と関心を深めることも今後期待される取り組みである。このような問題意識は、既に参加者の間に培われつつある。

注

- 1) 上條秀元「問題解決技法の導入による成人学習プログラムの開発」、宮崎大学生涯学習教育研究センター研究紀要『生涯学習研究』第3号（1998年2月）
- 2) 同、2頁
- 3) 山本恒夫「生涯学習と学習方法」、伊藤俊

夫, 山本恒夫編著『生涯学習の方法』(第一法規, 1993年5月), 15~16頁

- 4) 辻 功「生涯学習の方法」, 日本生涯教育学会編『生涯学習事典 増補版』(東京書籍, 1990年4月), 364~366頁
- 5) 高橋 誠『問題解決手法の知識』(日本経済新聞社日経文庫, 1984年9月), 57頁
- 6) 同, 35頁

(1999年1月28日受稿, 1999年3月5日受理)